当日司会もし、企画を用意した側に属していた人間としてはやや無責任な言い方になったかもしれないが、特設部会の前後のさまざまな議論を通じて自分なりに感じ、少しずつわかってきた反省点として、あえて意見を述べてみた。

このほかにも当日の報告や討論をめぐっては色々と意見があるが、別の機会に述べたい。ともかくも、こうした形で部会が開かれ、150人以上の人たちが参加したことは画期的な意義を持つだろう。今後も、さまざまなところで史料保存や市民の歴史意識と関わって歴史学の課題が議論される場がもたれるよう期待したい。

— ¢ — ¢ — ¢ — ¢ — ¢ — ¢ — ¢ — ¢ —

日本史研究会大会特設部会参加者の感想文から

■荒武賢一郎（花園大学大学院）

史料ネットのような大がかりな史料救出・整理保全運動は、史上初めてだと思います。私自身は、数回資料整理をお手伝いしたくらいで、救出活動に直接参加しておりませんが、当初から頑張ってこられた人々の行動は、歴史界に大きな成果をもたらしたと思います。　質問としては、これから史料ネットはどのような方向に進んでいくのか、それがもっと詳しく知りたいと思います。そして私も、史料ネットの活動に、出来るだけ参加していきたいと思います。

奥村報告について考えると、[2]の歴史意識の問題で国体観念について論及し、神戸市史で検証していたが、これを見る前に、自治体史とはどういうものかを定義付けしなければ議論にならない。国民的歴史学運動の点で、奥村氏自身の考え方が知りたい。

大国さんの展望で、在野アーキビストというように区別するのはおかしいし、アーキビスト全体を養成するという点での大国氏の構想が知りたい。

■伊藤俊一（名城大学）

歴史研究者や、行政担当者を養成する大学・大学院教育の中に、今日議論したような問題を、どのようにして取り入れるかについて考えなければならないと思いました。

■達　和陽（岡山大学）

史料ネットがこれほどの規模とは思わなかったので、市民との関係を問うだけのことがあるなと思った。ただ史料ネットのブレーンは、本当に市民と対等の立場なのだろうか。意識のズレは、立場が違うし生計の立て方もちがうので、当然ではないだろうか。何となく上の意識を持って、導いてあげているという気がした。もちろん、歴史学が実生活で活動しているということで素晴らしいと思うし、本当に歴史学を考えているのを見て、かなりの刺激になりました。僕はまだよく分かりませんが頑張ってください。

市民と研究者の歴史意識のギャップの議論では、ギャップを認識し、それを埋めるのを意識してしまうのではなく、どういう風にそれを埋めてきたのかというのをもっと言ってほしかった。生活者という表現を使うことで研究者が近づいたような感じを持たしているが、生活者に歴史資料がなぜ重要か、どのように利用していけるのかを、ちゃんと伝えられているのか疑問に思った。危機意識は人を動かすが、急進的になってしまい、本来の目的からずれてしまう恐れもあるのではないかと思いました。

■大村拓生（大阪市立大学大学院）

文書に偏りすぎたのでは。蔵の中にあるのは文書だけでなく、民具・農具、様々な美術品（調度品、絵画など）が一体となって存在しているのであり、そこから文書だけを取りあげるのは、考え直すべきではないか。何を持っているのかを確認し、位置づけるのも歴史学の課題としなければならない。そうしないとバラバラになってしまう。最近の「お宝」ブームは、金で価値序列を決定しており、その問題性を認識していくべきだろう。調査等も、文書だけでなく、全てのものを対象とした体制を構築していく必要があろう。そのために、様々な分野の研究者との協同を組織していかないと、全体としての歴史をとらえられないのではないか。

■加藤幸三郎（専修大学）

粘り強く、苦労を乗り越えて保存運動を担われ、進めてこられたことに深く敬意を表します。運動を通じて、神戸の歴史を改めて見直し、再検討されるのは有効な分析視角だと確信します。

横浜という“開港場”との共通性なり、逆に関東大震災後の“二港主義”あるいは輸出港横浜への代位又は代行という視点では、関わらな